

- 15) *Radula subpallens* Steph., Sp. Hep. 4: 203 (1910).
Specim. exam. Mt. Kinabalu, 1350-1500 m alt.: On tree trunk, M. 253244.
- 16) *Radula tjibodensis* Goebel, Ann. Jard. Bot. Buitenzorg 7: 53 (1887).
Specim. exam. Mt. Kinabalu, 1350-2500 m alt.: On living leaves, Z. 250514, M. 252490.

References

- Castle, H. 1963. A revision of the genus *Radula*. Part II. Subgenus *Acro-radula* section 6. *Saccatae* Revue Bryol. Lichénol. 32: 1-48.—Mizutani, M. 1966. Epiphyllous species of Lejeuneaceae from Sabah (North Borneo). Journ. Hattori Bot. Lab. 29: 153-170.

* * * *

1963年に、服部植物研究所の岩月善之助、水谷正美両博士がボルネオのキナバル山で採集された採集品の中から、とくに *Radula* 属だけを調べて16種の *Radula* を認め、同時に一新種の記載を行なった。16種の内、10種はボルネオ新産である。

□Kremp, G. O. W. & T. Kawasaki: **The spores of the Pteridophytes.** B5版, 398ページ, 広川書店(東京), 1972年, 定価13,000円。本書は全部英語で書かれどこにも日本語が見られないが、外箱にG. O. W. クレンプ・川崎次男共著: 世界の孢子図説—現生孢子・化石孢子—の題がついている。すなわちシダ植物の孢子だけの花粉学的な図鑑である。今まで植物分類学や花粉学の立場からシダの孢子を取り扱った論文や書物は多いけれども、本書ほどの大作は初めてである。内容は2部に分かれている。第1部は「現生シダ植物の孢子」で、288属について写真と図のおおの1~3個ずつの全形図、それに細部の図がついている。またサンプル10例ほどについてそれぞれ形態や寸法の記載が加えてある。各属1種ずつを選んで書いてあるから288種になるわけであるが、ほとんどの属はその属の基準種を資料としているので、分類学的価値が非常に高い。これらのサンプルは全米の大学や博物館の標本から求めたということである。第2部は「化石シダ植物の孢子のおもな属の基準種」というもので、地質学や花粉学的古植物学の領域である。429の孢子種について図1個ずつ、それに産地・地質時代その他の記載が整理され、並べ方は地質年代の順のようである。このように本書はシダ植物の孢子についてのデータを提供するもので、花粉学・地質学・石油探鉱学などの方面はもちろん、植物系統学などの方面にも大いに役に立つ書物である。(伊藤 洋)